

# 石川町資源調査調書

通し番号	95	整理番号	8 - 009	作成	平成19年2月
名称	添田 百枝		項目	人物	
管理	住所	石川町大字湯郷度字米子平			
	連絡先				
	管理者及び所有者				
概要	<p>添田百枝博士は、湯郷度字米子平の出身で、昭和11年（1936年）年帝国女子医学薬学専門学校医学科を卒業し、のち東京帝国大学医学部附属伝染病研究所（現東大医科学研究所）の研究者となった。</p> <p>その後、トリコマイシン（牛の流産予防や、女性特有の疾病に効能のある抗カビ、抗酵母、抗原中剤）の開発や癌研究で世界的に名声を博し、1955年にはトリコマイシン製造法で、総理大臣賞を、また1970年には、マリナマイシン（抗がん剤）の研究開発で吉岡弥生賞を受賞するなど、世界の医学の進歩発展に尽力した。</p> <p>昭和57年（1982年）年11月6日に、条例を制定してから初めての石川町名誉町民章が贈られた。</p>				
参考文献	ビジュアル石川町の歴史～石川町史別巻～				
関連項目					
備考					
写真及び位置図等					
					
研究室での添田百枝博士（添田武志氏蔵）					

# 石川町資源調査調書

通し番号	96	整理番号	8	-	010	作成	平成19年2月
名称	シバヤ 直蔵 渋谷 直蔵				項目	人物	
管理	住所	本籍 石川町字古館					
	連絡先						
	管理者及び所有者						
概要	<p>大正5年石川町で生まれ、昭和15年3月東京大学卒業後直ちに内務省に入省し、昭和35年労働基準局を最後に退官した。 昭和35年11月、衆議院議員に初当選以来連続9回当選を果たしている。 昭和53年12月には自治大臣、国家公安委員長、北海道開発所長官に就任し、昭和60年10月には在職25年国会議員として、掲額議員となった。国政はもちろん石川町の発展に多大の貢献をされました。</p> <p>昭和60年10月16日に、石川町二人目の名誉町民に推戴されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主な著作</li> <li>・戦後日本の雇用失業とその対策</li> <li>・職業訓練法の解説</li> <li>・労働基準法の詳解</li> <li>・中小企業のための労働管理</li> </ul>						
参考文献	ビジュアル石川町の歴史～石川町史別巻～ 編纂室資料						
関連項目	添田百枝（8-009）						
備考	1916年生～1985年没						
写真及び位置図等							
							
役場前 渋谷直蔵の銅像							

# 石川町資源調査調書

通し番号	97	整理番号	8 - 011	作成	平成19年2月
名称	三森 幹雄		項目	人物	
管理	住所	石川町旧形見村			
	連絡先				
	管理者及び所有者				
概要	<p>石川町形見出身の俳人。                  26歳の時江戸に上り、惺庵西馬に入門して俳諧を学ぶ。そして春秋庵をついで芭蕉翁第九世の伝統を受けた。この時静波から幹雄と号をあらためている。31歳で京橋丸太新道に庵を結び、潜窓と号して俳人として世に出た。別号に不去庵、香楠居、桐子園、春秋庵、天寿老人などあり、また三木雄とも名乗った。著書は多く、『玉川紀行』『再遊記』『俳諧自在法』『俳諧名譽談』などがあり、『俳諧明倫雑誌』を没するまで30年にわたって刊行した。</p> <p>石川町双里に句碑がある。俳画もよくし、好んで亀を描き、天覧に浴したことがあるという。明治時代の旧派を代表する俳人であった。</p> <p>ひややかな水踏あてぬ草紅葉                  窓一つ持ても月のあるじかな                  時雨にも玉巻そむる芭蕉かな                  今日のはや山にかぶさる桜かな                  春秋の草木に習う翁かな</p>				
参考文献	石川町史第6巻 各論編1				
関連項目	大教正三森幹雄顕彰碑（7-009）				
備考	1829年生～1910年没				
写真及び位置図等					
<p style="text-align: center;">三森幹雄</p> 					

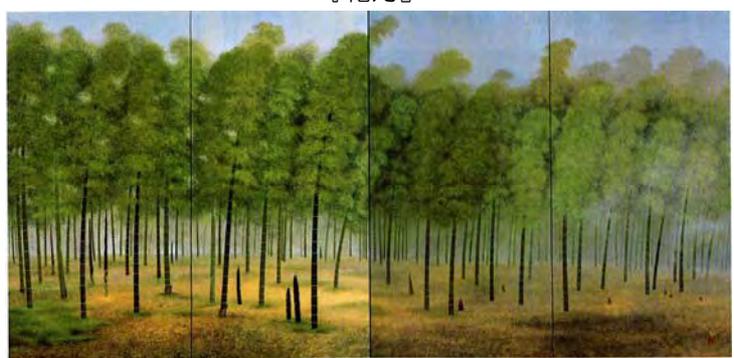
# 石川町資源調査調書

通し番号	98	整理番号	8	-	012	作成	平成19年2月
名称	ツノダ 磐谷 角田 磐谷				項目	人物	
管理	住所						
	連絡先						
	管理者及び所有者						
概要	<p>角田磐谷は、石川町出身の日本画家として、よく知られている存在である。</p> <p>磐谷は、第二次大戦前は東京、戦後は須賀川を拠点に活動し、特に福島県展発展に功績があったため、県文化功労賞を受けている。花鳥画に秀で、須賀川牡丹園の牡丹を繰り返し丹念に描き、また他の日本画家に牡丹園のすばらしさを伝えるなど、「牡丹の画家」といってよい作家である。</p> <p>戦火が激しくなった昭和20年には石川町に疎開し、第二次大戦終了後は石川、須賀川にとどまって県内の日本画振興のため尽力している。中でも県展の運営には初期からかわり、さらに日本画の研究団体である彩心会の指導に当るなど、情熱あふれる指導は特筆すべき後半生の活動である。昭和39年には画業50年自選展を開催し、さらに福島県文化功労賞を受けている。翌年には画集『画人角田磐谷』が刊行されている。昭和45年(1970年)、須賀川市で81歳の生涯を閉じた。</p>						
参考文献	石川町史第6巻 各論編1						
関連項目							
備考	1889年生～1970年没						
写真及び位置図等							
角田磐谷							
							
		『あさつゆ』		『黒牡丹』			
							
		『屋後展望』		『漢織呉織之図』			

# 石川町資源調査調書

通し番号	99	整理番号	8	-	013	作成	平成19年2月
名称	ヒサノフオ 久野修男				項目	人物	
管理	住所	石川町字南町					
	連絡先						
	管理者及び所有者						
概要	<p>石川町字南町生まれ、太平洋美術学校を卒業、昭和15年の二科展に初入選、第二次大戦前には大東亜戦争美術展等にたびたび入選し、戦後は二紀会の結成に参加し、昭和25年同人、昭和32年委員などをへて、昭和52年には福島県支部長を務めるなど、県内の二紀会発展に尽力した。</p> <p>南仏風景を得意とし、サエグサ画廊などで個展を多く開いている。東京で制作していたが、晩年石川町に戻って制作を続け、現在主要作品が石川町立歴史民俗資料館に収蔵されている。昭和58年没。代表作は、昭和56年の県展優秀作品(福島県が購入し、のち県立美術館収蔵)である《南仏風景(2)》など。いかにも南仏らしい乾いた絵肌が特徴である。</p>						
参考文献	石川町史第6巻 各論編1						
関連項目	歴史民俗資料館(11-001)						
備考	1917年生~1983年没						
写真及び位置図等							
							
《南仏風景(2)》							

# 石川町資源調査調書

通し番号	100	整理番号	8	-	014	作成	平成19年2月
名称	コイズミトモエ 小泉智英				項目	人物	
管理	住所						
	連絡先						
	管理者及び所有者						
概要	<p>小泉智英は、石川郡石川町出身の日本画家。美術団体には属さず個展を中心に活動し、現代の日本画を代表する一人として、個展以外にも数多くのグループ展へ出品している。現代の石川町を代表する作家である。</p> <p>もともと墨絵を描きたくて大学の門をたたいた小泉は、対象で、現在は福島県立美術館の収蔵作品となっている。以後はグループ「野火」をはじめとするグループ展や、個展をたびたび開催し、人気作家として知られるようになる。平成16年には、その集大成ともいえる回顧展が川越市立美術館で開催され、初期から最近作に至る45点が展示され、あらだめてその画業が注目された。</p> <p>小泉の作風については、師である横山操の晩年作《越路十景》などの水墨山水の流れをくんだ風景画が知られる。</p>						
参考文献	石川町史第6巻 各論編1						
関連項目							
備考	1944年生～						
写真及び位置図等							
<p>小泉智英</p> 		 <p>『霜月』</p>  <p>『竹林四季』</p>					

# 石川町資源調査調書

通し番号	101	整理番号	8	-	015	作成	平成19年3月
名称	大竹亀蔵 <small>オオタケカメゾウ</small>				項目	人物	
管理	住所	石川町大字双里字七鍬石地内					
	連絡先						
	管理者及び所有者						
	<p>大竹亀蔵は日本の炭焼史に残る炭焼きの名人です。彼の製炭技術は、近代日本製炭技術の基礎を築きました。</p> <p>田中長嶺や榑崎窯を開発した榑崎桂三及び、八名窯を開発した織田源松等に大竹は師事され、後に大竹窯を考案した人です。</p> <p>大正9年、大日本山林会が東京大学清澄演習林で第1回全国大会の炭窯性能試験を行ったとき、テストの結果全国から5基の炭窯が選定されそのひとつに大竹窯が選ばれた。この窯は優秀であり、炭化技術も最上級と実証されています。このテストに残った窯は、大竹窯のほかに大正窯、長野窯、英窯、八名窯であり、これらは、当時、日本の代表的炭窯でした。山林会の炭窯性能試験は、後、大正15年、昭和9年、昭和18年と10年ごとに行われました。木炭は、当時、年間200万トンに達し、(現在は、37,000トン)自動車燃料にも大量に使用された。大竹さんは、大正14年から昭和19年まで20年間福島県の製炭技師として勤務され、大竹窯は、全国に普及したが、特に、福島県がその主力で大竹窯が多い。また、岩手県は、榑崎窯、島根県は、島根八名窯であり、日本の黒炭の生産量の過半数は、これらの窯で生産されたものである。</p>						
参考文献	ビジュアル石川町の歴史～石川町史別巻～ 石川町ホームページ <a href="http://www.town.ishikawa.fukushima.jp">http://www.town.ishikawa.fukushima.jp</a>						
関連項目							
備考							
写真及び位置図等							
							
全 景				位置図			